

29

平成 29 年度 事業 報告 書



とちぎ協働デザインリーグ

TOCHIGI COLLABORATION DESIGN LEAGUE

みんなと育むまちづくりシンクタンク

目 次

主な実施事業写真	1
1 コミュニティカレッジ 2017（栃木県コミュニティ協会）	2
2 若者の社会貢献活動参加促進事業（栃木県県民生活部県民文化課）	8
3 企業の協働参加促進事業（栃木県県民生活部県民文化課）	12
4 栃木グリーン・ツーリズム推進事業（栃木県農政部農村振興課）	14
5 中山間地域元気創出事業〔企業連携促進事業〕（栃木県農政部農村振興課）	18
6 地域活動サポート支援事業（栃木県那須農業振興事務所）	20
7 「伝えるコツを身につけよう」NPO のための広報スキルアップセミナー	21
8 地域における「第三者組織評価」普及促進プログラム	22
9 とちぎ協働デザインリーグ 10 周年記念事業	22

<参考>

とちぎ協働デザインリーグ 理事会・総会開催状況	23
-------------------------------	----

主 な 実 施 事 業 写 真



コミュニティカレッジ 2017

住みよい地域社会をつくるためには、一人ひとりが住んでいる地域に愛着を持ち、地域の課題について話し合い、協力して課題の解決に向けて行動を起こすことが大切です。一人でも多くの人が行動を起こせるよう、リーダー養成を目的にコミュニティカレッジを実施しています。



若者の社会貢献活動参加促進事業

各地域で活動している団体と若者とが直接出会い、つながりを深める場を設けることで、若者の社会貢献活動への関心や意欲を喚起します。また、地域における社会貢献活動の担い手確保および育成を図るべく実施しています。



企業の協働参加促進事業

企業は、人材、資金、地域とのつながりなどを持ち、協働における重要な役割を担うことが期待されています。社会貢献に取り組んでいる経済団体や市町中間支援センターと協力し、企業とNPO等との協働対話フォーラムを実施しています。



栃木グリーン・ツーリズム推進事業

宿泊を伴う滞在型のグリーン・ツーリズムや訪日外国人旅行者の受入など、滞在型グリーン・ツーリズムの推進に向け多様なニーズに対応した受入態勢の調査・検討を行います。また、検討結果をもとに誘客プログラムを実施し、今後のグリーン・ツーリズム推進につなげます。



中山間地域元気創出事業(企業連携促進事業)

農地の荒廃や集落機能の低下が進行している中山間地域の活性化を図るため、中山間地域と農山村地域での地域保全活動や事業活動などに関心のある企業とを結び付けるなど、連携した地域づくりや継続的な協働活動等を支援しています。

コミュニティカレッジ 2017 (栃木県コミュニティ協会)

I 趣 旨

住みよい地域社会をつくるためには、一人ひとりが住んでいる地域に愛着を持ち、地域の課題について話し合い、協力して課題の解決に向けて行動を起こすことが大切である。一人でも多くの人が行動を起こせるよう、リーダー養成を目的にコミュニティカレッジを実施する。

＜平成 29 年度全体テーマ：「まつり」と地域コミュニティ＞

県内各地では、生活に結びついた様々な「まつり」が地域住民により長年受け継がれ、コミュニティの維持向上が図られてきた。また、近年、マルシェなどの新たな地域活性化イベント（まつり）も積極的に開催されるようになってきている。こうした「まつり」には、古くからの伝統を今に継承するだけでなく、社会の変化に応じて新住民も巻き込みながら、人々や地域の絆を強くしていくことが期待される。そこで、地域の「まつり」をコミュニティづくりにどう活かしていくか、地域内外の交流や多様な視点からの意見交換等を通じて探っていく。

II 概 要

【第 1 回全体勉強会 宇都宮市ぽぽらカレッジ】

1 日 時：平成 29 年 9 月 20 日（水）
10：00～15：30

2 会 場：ぽ・ぽ・ら

3 参加者：36 名

4 テーマ：人のつながりが地域の力

5 プログラム

- (1) 講義「地域イベントの経営学」
- (2) 意見交換（パネル展示）・交流
- (3) 意見交換（ワークショップ）

6 まとめ

(1) 講義「地域イベントの経営学」

講師：とちぎ協働デザインリーグ理事／作新学院大学名誉教授 橋立 達夫

イベントやまつりは、通常は短期的な、その日限り、その場限りのものだが、それを持続的に地域の発展・振興に役立てる、あるいは地域の維持に役立てる、そのためには、「地域経営」という大きな目でまつりを考えていく必要がある。地域住民は様々な方向を向いて活動しており、全員一斉に一つの方向を向いて何かをやろうということではなく、一人ひとりが自分の出来ることを出来る時に動いていく、そういうまちづくりを考えていくことが大切である。地域の 1 % の人が動けば地域が少し動き始め、1 割の人が動けば地域全体が動いている状況に見える。イベントは、地域に新しい文化の風を起こす試みであり、特に、外部の人たちの意見、外からの風が吹き込むことは、大きな効果がある。

外部の力を持続的に地域おこしの力として内部化することを考えておくべきである。また、来場者が単なるお客様でなく、自らが積極的に参加し、主催者と共鳴して活動を担うサポーターになってくれるような、「感動と共感」で人の輪を広げる仕組みをつくることも重要である。

まつりは高齢者への尊敬を認識する場であり、そういう輪の中で子どもたちを育てる、子どもたちにつなぐことが必要だと思う。イベントの手順を合理化しようという動きは避けられないように思われるが、あきらめる前にもう一工夫できないか。イベントの効果を定常的な地域おこしに活かすためにはどうしたらよいか。いつも軸足をそこに置いて考え、経営センスを磨いていこう。



(2) 意見交換会（パネル展示）・交流

参加者に、それぞれの地域や団体の活動状況等をパネルにまとめて持ち寄っていただき、パネル展示の時間を設け、お茶を飲みながら意見交換し、交流を深めた。

(3) 意見交換会（ワークショップ）

講義「地域イベントの経営学」、パネル展示を介した意見交換・交流をもとに、「高根沢町宝積寺の祭り屋台の活用」を参考事例として、「まつり」の継承・復活について意見交換した。



① 地域の誇りの復活を（とちぎ協働デザインリーグ理事／作新学院大学名誉教授 橋立 達夫）

屋台は、その昔、地域に財力があった時代の人たちが作った地域の遺産である。少しずつ朽ちていく部分はあるが、本当の財産は祭りを支えた人々の営みであり、そのソフトウェアが一番大事だと思う。そこで、こんな屋台があることを知らせることで力を誘発できないか。例えば、中学生や高校生に見せて、この屋台を引いてみたくないかい？と声かけをする、そんな機会があっても良いと思う。また、真ん中に屋台がある屋台カフェを作っ

てみても良い。カフェに来た人が、この屋台を一度動かしたいと思ってくれる機運が生まれてくる、そんなこともあり得ると思う。全体として、キーワードは「想い」。想いをつながられること、想いを復活できるかが大切である。多くの人たちがそれぞれ、屋台を復活してみたいとか、祭りを復活していきたいなどの想いを持ってくれること。そのことにより、一人でも少しずつ変わり、少しずつ何かが変わっていけば、自分が得意な分野で何かこれならできるというものが集まれば、大きな動きになる。さらに言えば、これは地域の誇りになる。屋台自体もそうだし、それを復活させたこと、みんなで地域を支えたことが誇りになる。それが正にまちづくりの最終的な目標になる。それによって、町から出て行った人たちが戻ってきたり、子どもたちが町に残ったりという話にも通じてくると思う。

② 現代における伝統文化の活かし方（とちぎ協働デザインリーグ理事／宇都宮大学教授 高橋 俊守）

今の若い人たちの感覚でいうと、例えば「収穫祭」とこの山車をセットで見ることができれば良いのではないか。屋台を飾って、みんながごちそうだと思う物をそこに飾り、それをみんなで食べてみるなど、現代の今の感性の中ですり合わせる形で屋台を活用できないか。そして、その中に、その地区で暮らしてきた先人たちが、どういう思いでその土地で暮らしてきたのかを、次の世代の子どもたちにも伝えることが出来れば良いのではないか。こうした機会を少しずつ広げていけば、その地区ならではの屋台の現代社会での活かし方や、祭りを復活できる可能性があるのではないか。断絶してしまった流れを、もう一度、例えば、お年寄りへの聞き取り調査や、子どもたちへの語り伝承などから裾野を広げて、屋台に対しての理解を広げたり、今の収穫祭の中での活かし方を考えるなど、様々な仕掛けを作って、今の世の中に粹な地域の伝統文化が広げられたら良いと思う。



【第2回地域勉強会 宇都宮市雀宮カレッジ】

- 1 日 時：平成 29 年 11 月 5 日（日）
10：00～15：30
- 2 会 場：雀宮地区市民センターと周辺地域
- 3 参加者：29 名
- 4 テーマ：夜祭に人が集い、地域に息吹を
雀宮地区の概要と群雀プロジェクト「夜祭」
の活動事例等に学ぶ
- 5 プログラム
 - (1) 地区の概要説明
 - (2) 「夜祭」活動の報告
群雀プロジェクト 代表 篠崎 崇博 氏
 - (3) まちあるき
市民センター発 →（車窓から旧宿場町） →①夜祭会場（雀の宮歯科医院） →
②仮本陣 →③JR 雀宮駅 →④市立南図書館 →市民センター着
 - (4) 意見交換会（ワークショップ）

6 講評及びまとめ

講師：とちぎ協働デザインリーグ理事／宇都宮大学教授 高橋 俊守

(1) 多世代に伝えられるようなつながり

群雀プロジェクトのイメージとして、「人のつながりのデザイン」ということが思い浮かんだ。このプロジェクトを通じて、人と人とをどうつなげていくのかというときに、一つは、人と人との心、情報というソフト面。また、具体的にまつりにしていくときの日時、場所、人、財源等のハード面。ハードソフト、両面でいろいろと工夫されている、非常に興味深い取り組みである。

今後の可能性のキーワードは、「多世代に伝えられるようなつながり」だと思う。子ども向けの時間帯を設ける、あるいは、多世代にとって楽しみになるような仕掛けづくりをどのようにしていくのか等、



→①夜祭会場（雀の宮歯科医院） →
②仮本陣 →③JR 雀宮駅 →④市立南図書館 →市民センター着

いろいろな可能性や伸びしろが沢山あると感じた。非常に面白いと思ったのは、「コミュニティ公園」というアイデアである。コンセプトを具体化する一つの過程としてのイベントだと思う。その延長線上にどのようなものが実現するのかということを考えたときに、地域の人々に本当に必要とされ、地域を豊かにするような公園。将来の目標につながる、洗練された意見が沢山出たと思う。

(2) 地域運営組織としての可能性

群雀の取り組みは、様々なところで報道もなされており、今後どうなっていくのかと注目度、期待が高い。他地域に元気を分け与える、応援していきたい取り組みである。従来型、紋切り型のスタイルと何が違うかという、集まってくる人たちの心に何か響くものを提供できるかどうか、その力量である。集まってくる人たちを感動させるような仕組みかどうか。こういった見えざる本当の評価は難しいが、そういう面で、お洒落な店を先陣を切っている人たちが、「私たちも参加したい」と集まってきていることが、大事なポイントである。あのスペースに 6,000 人が集まるのは、大きく成功しているイベントといえる。一人ひとりに感動を与えて帰ってもらう、継続させるためには、見えざる相当な苦労があるものと思う。質の高いイベントを継続してやるというのは大変なこと。キーワードとしては、「地域運営組織」がある。イベントを実施すること自体が財産ではなく、そこを通じて作られていく人と人をつなぐ組織＝地域運営組織が、どのような方向でどのような力を発揮するのかというのが、地域活性化の本質的なテーマになってきている。したがって、このプロジェクトが、イベントの質も達成されている中で、最終的に、どのような地域運営組織として、さらに発展していくのかということが源となる。その運営組織の仲間として、若い人たちをどう巻き込んで、高校生などともどうコミットしていくのかななどの工夫も必要である。栃木県には、各学校に「地域連携教員」という、全国的にも珍しい取り組みがあるため、地域連携教員に声かけをしたり、あるいは、高校生に生の意見を聞くなども良いのではないかな。

(3) いかに居心地の良い空間をつくるか

何も無い空間で、良くここまでできたというのが、外部の人にとっての率直な感想だと思う。なぜ、それだけ人が集まったのか。成功のポイントとしては、「来てくれた人が感動を持ち帰る」ということが、イベントの成功・継続やリピーターの確保に大きな意味をもっている。今は高度情報化社会で、あまり宣伝をしなくても、訪れた人たちが自ら宣伝役となって、その地区の良さを広げてくれる。そのため、訪れた人々に「良いな」という気持ちを持ち帰ってもらうことが重要である。様々な価値観や世代の人たちが集まった時に、心が一つになる、クロスオーバーできるような分かりやすいものが力をもつ。この場合はキャンドルである。様々な人がキャンドルに興味をもって共有して、理解を得ているのだと思う。それを見せる仕掛けも、見る人たちの気持ちを考えて工夫しているところが評価されている。

また、仮本陣のような歴史的資源を使って、その地域でしかできないようなものを活用すると、さらに価値が高まる。そこにしかない、そこでやるのが正当であるという証になり、その地域の誇りや安心感、自信につながるため、そうした広がりが出て来ると面白い。さらに、地域の特性として、住宅地として利用者が増えているということがある。新しく外から入ってくる人たちにとって、いかに居心地の良い空間を作るか、そこまで考えてコミットしてイベントをされていることが、お話を聞いて良く分かった。人が沢山住んで増えてくる地域は良い町だと実際に証明できるようなことを育てていくことが、大きな目標になる。ここでしかできないもの、必然性などを考え、人が増えてくる地域での取組みをどうするかと進めていくと、未来的な、実験的な仕掛けになる。



(4) 行政との連携

この取組みの特徴は、行政に頼らず、協賛金を自分たちで集めて、プレずに自由に開催できていることにある。住民主体のまちづくり、若者を巻き込み、大きなうねりを作っている。では、これから組織の将来を考えたときに、行政とどうつき合うべきか。今、行政は市町村合併により広域化することによって、行政独自では市の隅々まできめ細かなサービスを提供することが限界となり、まちづくりに市民の力が不可欠となっている。行政職員も意識変革をしていく必要があるが、行政の数少ない担当者が、隅々



までのサービスを提供することは不可能である。行政とどうつき合っていくかという新しい時代になっているが、主従逆転の発想により、行政の力をこの活動に巻き込んでいくことを考えても良い。理解のある人材、退職者など、交渉能力のある行政経験者を味方につけるなど、行政と着かず離れずの関係を築くと、活動の基盤になる可能性もある。行政もつながりの一つであり、このプロジェクトに行政の力をどう取り込んでいくかということも、そろそろ検討しても良いと思う。

また、「子どもたちにどう楽しんでもらえるか」という想いが強い。子どもたちが地域で活躍できるような場づくりは、日本独特のものである。祭りを子どもたちが楽しめるようにやっているという国は、他にない。この心を今の日本人がどのくらい覚えているかと考えると、ハッとさせられることがある。子どもたちにどうしたら楽しく過ごしてもらうかということを考えて活動していけば、地域価値全体が向上し、新住民が増えて、様々な課題に直面しても、必ず答えが出るものと思う。

さらに、回覧板の話は大切である。高度情報化が加速していくと、情報化についていけない人は情報弱者となり、情報格差が生まれるのは大きな社会問題である。群雀では、イベント周知は、SNS など新しい情報手段で拡散しているものと思っていたが、回覧板も併用している気配りが素晴らしい。

【第3回地域勉強会 佐野市旗川カレッジ】

- 1 日時：平成29年11月27日（月）
10:00～15:30
- 2 会場：旗川地区公民館と周辺地域
- 3 参加者：58名
- 4 テーマ：多世代をつなぐ福祉まつり
旗川地区の概要と多世代交流による
「福祉まつり」の活動事例等に学ぶ
- 5 プログラム

- (1) 地区の概要説明
- (2) 「福祉まつり」活動等の報告
旗川地区コミュニティ・福祉協議会
会長 篠崎 征治 氏
子供育成部長 斎川 春義 氏
街づくり部長 尾崎 陽一 氏

(3) まちあるき

旗川地区公民館発 →①田中正造生家 →②人丸神社 →③安楽寺 →旗川地区公民館着

(4) 意見交換会（ワークショップ）

説明：芦荻獅子舞推進委員会 委員長 船渡川 政義 氏

6 講評及びまとめ

講師：とちぎ協働デザインリーグ理事／宇都宮大学教授 高橋 俊守

(1) 子育てとつながりを大切にするコミュニティ

旗川地区は、長い歴史を現代に引き継いでいる土地柄であり、磨けばまだまだ光る、宝満載な町である。地域の可能性というのは、他のところにはない、その地区にしかないようなものが沢山あり、そうした地域的な資源を宝として探し、磨き、どのように活用していくのかという課題がある。

また、長い歴史を、どのように未来に継承していくのかという課題もあると思う。では、そこに暮らす私たちが、どのようなことに気を配って生活していけば良いのかだが、旗川

地区では、今まで日本のコミュニティが一番大事にしてきたところに、きちんと目を配って活動されている。子どもが育つ環境を良いものにする、子どもを育てることに積極的に関わって未来につなげていくということに、非常に気を配られている。福祉まつりでも、「餅つき」にこだわっているということが良い。餅つきは、日本やアジアの照葉樹林の国の文化、何らかの寿ぎ（ことほぎ）の時には餅をつく文化である。臼、杵、ついた餅自体が粘る、つながって離れない、つながりを作り出している。「つながり」が重要なキーワードとして、私の心にも刻まれた。もち米を育てることから始めて、9町内会全部の杵で餅をつくということ、これをみんなでいただいて楽しむということ、これはぜひ続けていただきたい。ただの餅でないというのは、子どもたちと一緒に育てた餅であるということに、心に響くものがある。一つひとつのプロセスの中に、子どもたちの成長をともにする、子どもたちの笑顔がそこに隠されている。そういう試みの中に、子どもたちとのつながり、将来世代への見守りといった優しい想いが込められていると、実感したところである。子どもたちの笑顔を作り出すということが、コミュニティを元気にして、人々をつなげていく力の源泉になっていると、改めて感じた。

少子高齢化や世代の問題も、いくつか出てきていると思う。これからしばらく日本の時代を作っていくのは、むしろシニア世代である。下で支えるのがシニア世代で、上に数少なくなった子どもたちや現役の人たちが乗っている。今までの日本社会で、失われてしまった様々な部分に手が届く、非常にきめ細かな人づくりや地域づくりができる可能性があるということである。そう考えると、元気なシニア世代にはますます頑張ってほしい。シニア世代が、むしろ、まちづくりをリードすることで良いと思うしそのことが、町を非常に温かみのある、豊かなコミュニティに作り上げているということに、胸を張って良いと思う。



(2) 若い世代をどのように巻き込むか

では、若い人たちをどのようにして巻き込んでいくか。かつての日本には、地域、村の中に部会というものがあり、近代の教育制度（小学校、中学校）がきちんと確立するまでは、子どもたちは地区の中の様々な社会的な部会を渡り歩くようにして、地域の歴史と伝統、世代間の継承が、そこで全て図られてきた。それがなぜ今は出来にくくなったのか。これは、近代教育で、より充実した教育を受けさせるために、新しい制度の中で子どもたちが育つようになったこと。そうした中で、地域に学校があることは幸せなことだが、地域に学校がなく他地区に通うようになると、地域の歴史や伝統をどうやって受け継ぐのかという、深刻な問題がある。これだけ豊かな地域の中に、歴史や伝統、文化、受け継ぐべき知識がある場所では、学校教育の中に地域教育というものを取り入れていく努力が、ぜひとも必要と思う。また、現代の地域コミュニティを見ると、これまでの伝統的な組織＝コミュニティのあり方と、今の若い世代の人たちの新しいコミュニティのあり方・仕組みが、様々な形で入り混じる現象がある。現代は、情報化の進展の一方で、地区との関わりを感じさせる機会が非常に少なくなっている。良い意味で捉え直すと、若い人たちは、SNSやインターネットを使って、何かやりたいことを同じ興味を持っている人たちと、地区に関わらずすぐつながりを作る時代になってきている。そういう世代の人たちが、目的志向別に新しいコミュニティを形成して動くということが、あちこちで起きている。そのような若い人たちの動きを、今までのやり方とは少し違うが、受け入れて少しやらせてみようかということ。どのようにして、歴史と伝統があるコミュニティの中に位置づけて、若い人たちの力をどう取り入れていくか。これから、様々な試行錯誤や工夫ができるのではないと思う。これまでの試みを若い人たちに関わっていただくことで、外への情報発信などの部分でも、できる可能性があると思う。そして、芦畦獅子舞は、かつては、地域の将来を担って



いくリーダーの顔見せの場であった。そういう意味で、この時代に、この地区の将来を誰が担っていくのかということだが、男女の区別なく、この地域を担っていく志を持った人たちが活躍できるような社会に段々と変わってきていると思う。そのような形で、この芦畦獅子舞が、次世代の継承者としての若い人たちがこの地区を引っ張っていく、顔見せの場にも使えるようになれば、この地区に関心を持って、一緒にやっていきたいという若い人たちがデビューするような場にもなってくれば、若い人たちにも憧れを持って獅子舞の役割なども見直してもらえるのではないか。人口減少の課題もあるが、この地区に憧れて、ここに移り住むような人たちを受け入れられる下地づくり、準備などを考えていっても、将来に向けて、夢が広がる新しいきっかけになるかもしれない。様々な意味で、この地区は非常に充実しており、ぜひとも、この良さを活かしつつ、激動の時代の中で、新しい要素も少しずつ取り入れながら、さらに発展されることを心から願う。

Ⅲ コミュニティカレッジ 成果と課題

今年度は研修カリキュラムを変更し、初めに全体研修会を行ってから、2回の地域勉強会に出向いた。また、ワークショップ回数を1回増やして3回とし、参加者間の意見交換の機会を増やした。ワークショップの進行に当たっては、長年倉庫に眠っている祭り屋台や獅子舞の後継者育成などの課題を事例として紹介し、地域に即した意見交換がなされたものと思う。全体勉強会では、講師から、地域イベントを経営の視点から講義いただき、まつりの持つ力や可能性を学んだ。地域勉強会については、企画段階からホストコミュニティや講師にご協力・ご助言いただき、充実した内容となり、参加者から概ね好評を得た。課題としては、まちあるきの段取りが難しく、全体の研修時間が伸びてしまうため、改善が必要である。また、栃木県コミュニティ協会会員以外や若年者層の参加が少ないため、研修内容や広報の方法をさらに工夫する必要がある。

若者の社会貢献活動参加促進事業（栃木県県民生活部県民文化課）

1 趣 旨

社会貢献活動の担い手として、若者がボランティア活動に積極的に参加することが望まれているが、現状では若者の社会貢献活動への関心や参加率が、他の世代よりも低い状況にある。一方ボランティア団体等においては、慢性的な人材不足による活動の停滞という問題を抱えている。

このため、若者の社会貢献活動への関心や意欲を喚起し、活動参加を促進するためのイベントを開催し、もって地域における社会貢献活動の担い手確保・育成を図る。また、地域の中間支援組織（市町中間支援センター、市町社協等）とも連携し、各地域において活動を支援する組織と若者とが直接出会い、つながりを深める場とすることを目的とする。

2 概 要

年間テーマ：若い力で広がる笑顔

県央地域 テーマ：～私の夢を社会のチカラに！！～

日 時：平成 29 年 9 月 27 日（水）16：00～

会 場：作新学院大学清原キャンパス 中央研究棟 2 階 第一会議室

モデレーター：とちぎ協働デザインリーグ理事／作新学院大学女子短期大学部教授 西田 直樹

主 催：栃木県／とちぎ協働デザインリーグ

協 力：かぬま市民活動広場、真岡市市民活動推進センター

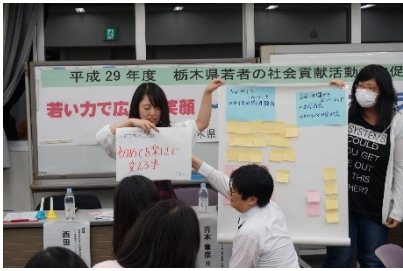
対 象：作新学院大学女子短期大学部学生、栃木県立宇都宮清陵高校生徒及び、社会貢献活動、ボランティア活動、NPO 活動等に関心のある若者（おおむね 10～20 歳代）、ボランティア団体、コミュニティビジネス・ソーシャルビジネス団体、企業等、市町中間支援センター、市町社会福祉協議会等

参 加：87 名（12 団体 15 名、一般参加者 72 名）＋事務局等 7 名

参加団体：

① おしゃべり妖精の会	② とちぎ竹とんぼ塾
③ NPO 法人いちかい子育てネット 羽ばたき	④ 野外活動探険隊 キャプテン・トムソーヤ
⑤ 読み聞かせボランティア	⑥ NPO 法人トチギ環境未来基地
⑦ 認定 NPO 法人だいじょうぶ	⑧ NPO 法人鹿沼 39
⑨ 宇都宮市まちづくりセンター “まちびあ”	⑩ NPO 法人次世代たかねざわ
⑪ 認定 NPO 法人うりずん	⑫ 宮つく（宇都宮・高校生まちづくりプロジェクト）

内 容：

①キースピーチ（青木氏）	②ショート PR	③トークセッション
		
④お互いを知って仲良く	⑤私に出来ること	⑥まとめ
		

「私の夢を社会のチカラへ」と高校生・大学生の学びを社会貢献につなげるプログラムを意識して実施。キースピーチとして作新学院女子短期大学幼児教育科科長青木教授より「学生がボランティア活動に関わる意義」について、お話を聞いた(写真①)。その後、参加団体からのショートPRがあり(写真②)、若者たちは各々興味のあるブースに散り「若者」と「団体」のトークセッションを行った(写真③)。セッションの内容は自己紹介から、若者は自分の趣味・興味関心を話し、団体情報から、「社会課題」の発見を行った。最後に、見つけた課題に対し、「私が出来ること」を発表した(写真⑤⑥)。

県南地域 テーマ：新たな自分との出会い仲間との出会い！！

日 時：平成29年11月26日(日) 14:00~16:30

会 場：栃木県立学悠館高校 2階会議室

モデレーター：NPO法人ハイジ 理事 鈴木 廣志 氏

協 力：栃木県立学悠館高等学校、とちぎ市民活動推進センターくらら、小山市市民活動センター、壬生町市民活動支援センターみぶりん、野木町ボランティア支援センターきりり館

参 加：36名(7団体9名、一般参加者27名)＋事務局等13名

参加団体：

①	(株)きぼう国際外語学院	②	栃木ウーヴァフットボールクラブ
③	清田建設工業株式会社福祉事業部K' きっず	④	NPO 法人栃木おやこ劇場
⑤	とちぎおもちゃ図書館「たんぽぽ」	⑥	みぶほたる
⑦	一般社団法人栃木青年会議所		

内 容：

①高校生スピーチ(相馬さん)		②団体PR
		
③だがしやひろちゃん	④ワークショップの様子	⑤まとめ発表
		

県南地域での事業開催にあたっては、市町の間支援センターを中心に企画運営を行った。特に参加者層と年齢層が近いセンター若手職員が活躍し、対話のしやすい環境づくりに配慮しながら実施した。また、講師のボランティア活動の一環でもある、「だがしやひろちゃん」を休憩時間に展開した(写真③)。プログラムは、鈴木先生によるキースピーチから始まり、実際に活動を実践している「蔵部」の相馬氏より、活動に参加する意義や得られたものなどを伝えていただいた(写真①)。参加団体からのPR(写真②)を経て、ワークショップを行った(写真④)。ワークショップでは、若者は「趣味」「部活」「好きなこと」、団体は「なぜその活動をしているか」「課題」「叶えたい未来像」を自己紹介の形で共有し、その材料を元に「自分ができること」や「若者のチカラを活かす方法」を共有し、発表を行った(写真⑤)。

県北地域 テーマ：気づく かわる かえられる

日 時：平成 29 年 12 月 9 日（土） 13:30～16:30

会 場：いきいきふれあいセンター 黒磯公民館 3 階多目的ホール

コーディネーター：とちぎ協働デザインリーグ理事／国際医療福祉大学准教授 大石 剛史

参 加：43 名（8 団体 11 名、一般参加者 32 名）＋事務局等 18 名

参加団体：

①	学生団体 みらとち	②	一般社団法人 えんがお
③	家庭教育オピニオンリーダー連合会 黒磯支部たんぽぽの会	④	フードバンク 黒南！
⑤	NPO 法人なすしおばらまちづくり プロジェクト	⑥	横枕青年団
⑦	ちえるし〜(FUNKIT)	⑧	一般社団法人 つばさ

内 容：

①キースピーチ（講師）	②大学生スピーチ（小林さん）	③団体PR
		
④盛り上がるグループワーク	⑤発表	⑥共有の時間
		

県北地域では、昨年までのネットワークを活かしつつも、更に内容の充実を図るため、高校生たちも含めて事業を企画し、実行した。また、「出会い」から「参加」へのシフトチェンジにも留意し、参加団体にも「受入」部分も重視しながら、事業への参加協力を求めていった。はじめに、小林氏(国際医療福祉大学)から、等身大の大学生生活と、ボランティアとの関わり、そこから生まれた「気づき」を話していただいた(写真②)。その後団体のPRを行い(写真③)、グループワークを行った(写真④)。グループワークでは、地域で活動している団体が、「どんな思いで、何をかなえようとしているのか?」を自分ごととして受け止め、「I 自分に出ることはあるか?」「II こんなことなら一緒に活動したい」を探りグループ毎に発表を行った(写真⑤)。最後に、交流を兼ねて各グループを訪問し、感想、意見等を交換し合った(写真⑥)。

3 フォローアップ

これまで、本事業を行い、出会いの場としての一定の結果を得られた。本年は事業後の状況を確認するため、アンケート調査を行った。回答のあった16団体のうち、8団体が事業への参加がなかったと回答している。また、若者においては、回答のあった71人のうち、52人が参加していないと回答しており、参加につながりづらい部分もあった。参加団体からは、「もっとPRの時間があれば参加につながった」との意見がある一方で、若者からは「団体の活動PRだけではなく、若者が参画することで何ができるかを一緒に考えたい。」などの意見があった。

4 成果と課題

県央地域

参加 12 団体と若者 73 名が出会いを果たすことができ、「出会いの場」としては、大きな成果があったと考える。しかし、「社会貢献活動への参加」という結果にはなかなか結びついておらず、その一因としては、当日のグループワークの人数差が大きく、沢山集まったグループとそうでないグループが出来てしまったことがあげられる。その後のフォローアップの回答によると、当日少人数で行ったグループには参加があったとのこと。しかし、大人数のグループほど参加が少ない傾向があり、当日のプログラム内の時間では、意見の集約が間に合わず、具体的なマッチングまでのイメージの共有が出来なかったものと考えられる。

県南地域

実施後のフォローアップまでを念頭にいれ、県南地域複数の中間支援センターと企画会議を重ねながら実行した。互いの資源を持ち寄りながら実施でき、横のつながりを深めることができ、若者の社会貢献活動をサポートする体制の基盤が出来たと感じた。課題としては、参加者アンケートから「同年代が参加する活動に参加したい」や、「若者がモデルとなる活動」など、既存団体が課題とする「団体の高齢化」とはミスマッチも生まれており、今後この溝をどのように埋め、若者社会貢献活動の未来をどのように描いていくのが課題である。

県北地域

昨年、運営に関わっていただいた、行政、社協、ボランティア団体等と、昨年の事業を踏まえたうえで事業実施できた。企画から参加した高校生たちの意見も取り入れ、参加申込方法に web 申込を追加したところ、約 6 割が web 申込を利用した。今後若者を巻き込む事業の広報方法について、有効な手段であることが実証できたことは大きかった。また、目標を「社会貢献活動団体との出会い」から「自分事としての参加」と、団体側も若者発のアイデアを事業に取り入れることを念頭にグループワークを行ったことで、活動へのより高い参加率という結果につながった。県北地域については、中間支援センターが少なく、今後に向けて、地域を俯瞰して支援する方策が必要ではなかろうか。多様なボランティア・NPO の中で、「若者」が社会貢献活動に参加するためには、参加の仕組みを企画できるコーディネーターが、これからも重要である。

事業を通して

現在、若者の社会貢献活動への参加率は、他世代に比べ高いにもかかわらず、社会貢献活動への関心は低いという調査結果がある。(内閣府より)これは、ボランティア活動の原則である「自主性、社会性、創造性、無償性」のどこかが欠けているのではないだろうか。若者が社会貢献活動と出会い、自らの活動として行くには、そのミッションに共感することはもちろんだが、その事業において「自己実現」を自覚できるようなコーディネートが重要である。



企業の協働参加促進事業（栃木県県民生活部県民文化課）

1 趣 旨

人口減少・超高齢社会の到来による地域活力の低下という困難を克服するには、地域社会の様々な主体が連携・協働していく必要がある。なかでも企業は、人材、資金、地域とのつながりを持ち、協働における重要な役割を担うことを期待されている。そのため、社会貢献に取り組んでいる県内経済団体や各市町で地域のNPO等の活動を支援する市町中間支援センターと協力して、企業の協働への理解、参加促進を図るとともに実際の協働事業の実施につなげることを目的とする。

2 概 要

■日時・会場：平成30年3月8日（木）13:00～16:30 栃木県庁 東館講堂

■名 称：企業とNPO等との協働対話フォーラム

■テ ー マ：新たな視点・新たな関係から、新しい価値を見いだすこれからの地域づくり

■対 象：栃木県内企業、NPO（地域団体・市民団体を含む）、行政等

■参加人数：第1部 83名（企業31名、NPO37名、行政9名、一般6名）

第2部 68名（企業21社25名、NPO28団体38名、行政2名、一般3名）

■プログラム：

第1部 基調講演テーマ「新たな視点から新たな価値を創造する連携・協働」

一般社団法人日本経済団体連合会 教育・CSR本部統括主幹 長沢恵美子氏

第2部 企業とNPO等との協働相談会

(1) 企業とNPO等との協働実態調査結果報告

(2) 企業とNPO等との協働相談会

①参加団体一覧&協働の可能性を見ながら、参加者自己紹介

②NPOを企業が訪問する第1ラウンド、対話シートの記入

③企業をNPOが訪問する第2ラウンド、対話シートの記入

◆名刺交換 自由に休憩できる場にて、リラックスした雰囲気的交流及び名刺交換

◆展示コーナー 参加者の社会貢献活動に関する持ち込みチラシや協働への理解促進を図るための資料等を配置（持ち帰り可）



3 成果と課題

■企業の協働への理解促進

- ・基調講演では、国連の持続可能な開発目標（SDGs）を通して、協働への理解促進が図られた。
- ・SDGsについては、参加者の関心度が高かった。講師から、基本的な知識・情報をわかりやすく、かつ実感をこめて話していただいたため、参加者の共感を得ることが出来た。
- ・4年目の事業であるが、協働相談会エントリー団体（企業・NPO各20団体）のうち企業・NPOと

もに7割が初参加団体であり、理解促進に寄与した。

■企業の協働への参加促進

- ・参加団体の「対話シート」をみると、すでに連携・協働している団体もあったが、ほとんどの団体は、積極的な対話を通じて新たな協働の可能性（アイデア等）を探ることができている。
- ・事業後、配付されたプロフィールシート及び参加団体一覧（協働の可能性）を参考に、今後のステップを各組織で考えていくことも可能である。
- ・今後の参加促進及び協働事業の実施にあたっては、中間支援センターの役割が重要と思われる。

■企業とNPO等が交流できる場

- ・協働相談会は、企業・NPOともに15団体を目安に企画したが、相談会への参加の可否が第1部の参加に影響を及ぼす状況となったため、20団体まで受け入れ見学エントリーも可能とした。その結果、相談会参加者が68名となり、様々な団体同士での活発な交流が見られた。
- ・交流の場としては、大きな成果をあげた反面、第2部の企画内容（協働の可能性を見いだすために必要なコミュニケーションの確保、組み立て、時間配分等）の見直しが必要になった。
- ・最終的に、68団体が納得いくコミュニケーションをとるには、今回の企画では時間不足が否めない。

■経済団体や市町中間支援センターとの協力

- ・経営者協会、経済同友会及び市町の中間支援センター4団体から参加協力を得て相談会を実施した。
- ・協働相談会に参加した団体が対話で得られた協働の可能性を実現したいというとき、地域の中間支援センターに相談できることを案内した。センターがない地域では、とちぎボランティアNPOセンターに相談できることを伝え、資料にも県内中間支援センターの紹介を入れた。
- ・講師の第2部講評でも、協働には中間支援センターの果たす役割が重要とのアドバイスがあった。

■地域への波及効果

- ・協働相談会のサポーターとして協力してくれた市町の中間支援センタースタッフや参加者から、自地域でも開催したいとの声があがり、今後に期待が持てる。
- ・協働への参加促進を図るには様々な手法が考えられ、地域にあったやり方で実施していくことが望まれるが、本事業の手法及び作成資料等により、地域の活動意欲を高めることが出来た。

4 今後に向けて

(1) 対話シートの活用及びフォローアップ

対話シートからは、様々な協働の可能性が見い出せる。また、今後、引き続き「情報交換をしたい、もう少し話をしてみたい、訪問してみたい」等の項目にチェックが入っている団体へのフォローアップにより、具体的な実践が広がる。

(2) 中間支援センターの役割

対話シートの設問「今後について」では、「中間支援センターに相談したい」へのチェックが非常に少なかった。企業やNPOにおいて、中間支援センターの存在や役割の認知度が低いことがうかがえる。

しかし、協働の実践には中間支援センターの果たす役割は大きく、認知度を上げるとともに、センターとしても自覚をもって取り組む姿勢が求められる。

(3) 企業とNPOとの協働意識に対する温度差

相談会満足度について、企業「かなり満足 56%、ほぼ満足 28%」、NPO「かなり満足 15%、ほぼ満足 59%」と回答。全体として概ね満足していただけたが、同じ時間を過ごしていても双方の感じ方に温度差があることが読み取れる。堅苦しくないネーミング及び気軽な雰囲気の出創等のほか、温度差をうめていくための工夫・検討の余地がある。

(4) 企業とNPO等とが出会える場の創出

多くのNPOにおいては、仲間内では相互理解できても、他からの共感を得、関係性を築くにあたって、さらに力をつけていく必要がある。今後もNPO等が多く企業と出会うことにより、自らを客観的に見つめ自発的に力をつけていけるよう、出会いの場の創出が求められる。

(5) 対等な立場へ

企業とNPOが出会うことによりそれぞれに刺激し合える部分があるが、協働意識の温度差に照らし合わせると、企業を知り、力をつけたNPO等が増えることにより、対等な立場でのコミュニケーションが期待できるのではないかと。それが「協働による新たな価値の創出」の第一歩と思われる。

1 趣 旨

グリーン・ツーリズム推進による農村地域への誘客促進を図るため、栃木県グリーン・ツーリズムネットワークの運営、宿泊を伴うグリーン・ツーリズムや訪日外国人旅行者の受入など、滞在型グリーン・ツーリズムの推進に向けて、多様な旅行者のニーズに対応した受入態勢の調査・検討、およびネットワーク会員の活動状況等の情報発信を行う。

2 概 要

■栃木県グリーン・ツーリズムネットワークの運営

栃木県グリーン・ツーリズムネットワークの事務局を担い、県内のグリーン・ツーリズムに関する問合せの対応やネットワーク会員の募集等、ネットワークの運営管理を行った。

■情報発信及び情報交換

ネットワーク会員の活動状況やイベント情報等を収集し、SNSや情報誌等を活用し、広くPRを行った。ネットワーク会員に対し、グリーン・ツーリズムに関する取組事例や研修会等の情報提供を行った。

■調査研究

都市住民や訪日外国人など県内外の旅行者を農村地域に誘客するため、3地域を選定し、宿泊を伴う滞在型のグリーン・ツーリズムに係る地域資源の整理、ワークショップ等による開催及び誘客プログラムの実施並びに反省会を開催した。

(1) 南那須地方

①第1回検討会

日 時：平成29年10月10日（火）

場 所：那須南農業協同組合 馬頭支店経済店舗

参加者：11名＋事務局11名

内 容：平成28年度モデルプログラムの実施報告
モデルプログラム実施に関する意見交換（ワークショップ）

意見交換では、モデルプログラム実施を前提に、ターゲット及びテーマの検討、具体的なプログラム内容の検討を実施した。参加者からは、「2地区一緒にツアーをした方が良い」、「通年で考えると市町の連携の可能性が広がる」など、那須烏山市と那珂川町の2地域連携でのモデルプログラム実施の要望が多くあがり、実施の方向性が固まった。また、地域主体での実施に向け、体制の確認ができた。その後、第1回検討会での方向性を受けて、地域主体でモデルプログラムの企画を行った。

②モデルプログラムの実施

日 時：平成29年11月22日（水）～23日（木）

参加者：モニター 首都圏在住男性2名、宇都宮市在住女性3名 計5名＋事務局6名

行 程：（1日目）道の駅ばとう集合～ゆず搾り体験～郷土食の昼食&ゆず搾り体験（御前岩物産センター）～鷲

子山上神社見学～道の駅ばとう～農家民泊（菜花の庄）

（2日目）農家民泊（菜花の庄）～国見山みかん園見学～古民家見学（ほたるの里の古民家おおぎす）～昼食（田舎そば処長山）～語り部による民話（竜門ふるさと民芸館）～竜門の滝・大平寺見学～意見交換会（竜門ふるさと民芸館）

参加者からは、「子供の頃おばあちゃんの家に行ったときみたいで温かみを感じた」、「ゆっくりできた」、「県内でもあま



り知られていないところを見られてよかった」、「農家さんと直接話ができてよかった」、「マイカーでの移動は荷物を積めるので楽だった」などの声を頂き、全体を通して満足していただいた。

③第2回検討会

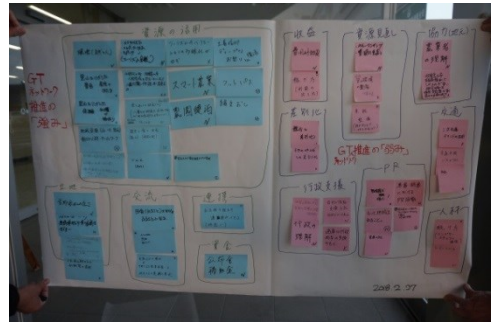
日 時：平成 30 年 2 月 27 日（火）

場 所：那須南農業協同組合 本店中会議室

参加者：12 名＋事務局 9 名

内 容：平成 28 年、平成 29 年モデルプログラム実施報告
地域内のグリーン・ツーリズム関連組織の活動報告
今後の方向性についての意見交換（ワークショップ）

今年度のモデルプログラムの実施報告ならびに、2 年間にわたる南那須地方のグリーン・ツーリズム推進における課題整理や今後の取組みについて検討した。検討会では、改めてグリーン・ツーリズム推進における強み、弱み、今後やってみたいこと、やったら良いと思うことの洗い出しを行った。また、今後の体制については、2 地域個別に季節や客層などに応じイベント・企画を進めていきつつ、相互にネットワークを活用しながら 2 地域連携を模索していくことを確認した。



④成果と課題

今年度は 2 年目の取組みとなることから、地域の自立と組織化を目指し事業推進を図った。第 1 回検討会でツアーコンセプトを決めた後、詳細のツアー企画・造成については県主催のグリーン・ツーリズム人材育成講座の受講者が主体となり、数回にわたる打合せを経て決定することができた。また、原価計算を作成することで採算性への意識も高まった。

ツアー実施の成果としては、交通の便が悪い地域での対策のひとつとしてマイカー利用によるツアーの企画が可能であること、地域内には魅力ある資源が多くあり四季を通じて誘客を図ることが可能であること、ターゲットとテーマを明確に地域の魅力にこだわったツアーを企画することで、首都圏からの誘客も十分期待できることなどが明らかになった。一方で、マイカーでのツアーの際のより詳細な情報提供ならびに当日の丁寧なサポートの必要性も浮き彫りになった。

今後の地域の自立のためには、採算性を意識し収支計画を綿密に立て、最少催行人数の設定などの実施条件を十分に検討すること、新たな事業者の発掘・育成、よりローカルな地域資源の発掘・整理とそれをもとにしたより魅力的なツアーを造成すること、通年で誘客を図るためにも、2 地域の連携をより強化し、点から面への活動に拡げ、受け入れ体制の構築及びグリーン・ツーリズム推進の組織化に発展させることが求められる。

(2) 河内地方

①第1回検討会

日 時：平成 29 年 12 月 19 日（火）

場 所：上三川町役場 3 階中会議室

参加者：10 名＋事務局 9 名

内 容：事業説明

モデルプログラム実施に関する意見交換（ワークショップ）

グリーン・ツーリズムの取組み初年度ということのを踏まえ、まずは地域のみんなでグリーン・ツーリズムをやってみよう！というテーマで意見交換を行った。意見交換では、地域資源の洗い出し、ターゲット・テーマの検討及びモデルプログラムの検討、課題抽出に取り組んでいただいた。参加者からは、「上三川町内にこれほどの資源があることを未だ知らない人が多い」、「まずは上三川町内の人（住民、転勤者、出張者など）に自分の地域の魅力を知ってもらうことから」、「ガイドブックには載っていない魅力がたくさんある」、



「地域の人同士の連携は今後とても大切、このような場は非常に有効である」などの意見が出された。

②モデルプログラムの実施

日 時：平成 30 年 1 月 27 日（土）

参加者：モニター 首都圏在住女性 7 名、足利市在住女性
3 名男性 3 名（1 家族 6 名） 計 13 名
＋事務局 7 名

行 程：JR 石橋駅東口集合～味噌作り体験・昼食（NP
O 法人民間稲作研究所）～いちご農家見学及び収穫体験（上
野いちご農園）～郷土料理しもつかれ・いちご大福作り体
験（上三川いきいきプラザ）～意見交換会（上三川いきい
きプラザ）～JR 石橋駅東口解散

意見交換会では、「農産物の知識や有機栽培の話が聞けて
よかった」、「近距離周遊でこれだけの内容はなかなかない
ので良かった」、「調理実習では、使ったもの（材料）をそ
の場で買えると良い」、「買い物もしたかった」などの意見
が出された。

③成果と課題

上三川町は今年度初めてのグリーン・ツーリズム事業の

実施であった。既に NPO 法人や農産物加工生産組合など独自でイベントを実施している団体から農業
者まで、多様な方に参加していただき、地域としてグリーン・ツーリズムを推進することの意味や効果
を実感していただけた。

ツアー実施の成果としては、地域内に人を呼べる魅力のある資源が十分あること、そのことで知名度
の低い上三川町の魅力を伝えることができたこと、買い物は旅行者にとって楽しい要素なので、道の
駅などの買い物スポットを行程に入れることで満足度が高まること、地域内の協力体制が強まったこと
などが挙げられる。一方で、プログラムが過剰気味となったことから、採算性を踏まえた企画の検討や
適切なサポーター数で実施できる体制の確立などの課題も浮き彫りになった。

今後の上三川町のグリーン・ツーリズムの方向性としては、眠っている魅力的な地域資源の掘り起こ
しと整理、地域内の活動組織や生産者のネットワークの拡大、長時間滞在してもらうための宿泊場所と
しての農家民泊の促進、近隣に大手企業工場があることから、工場見学などを組み込んだツアー企画や
企業の社員をターゲットにしたツアーの企画検討等が想定される。



(3) 下都賀地方

①第 1 回検討会

日 時：平成 30 年 1 月 16 日（火）

場 所：県下都賀庁舎 第一別館 1 階 101 会議室

参加者：7 名＋事務局 13 名

内 容：平成 28 年度モデルプログラムの実施報告
モデルプログラム実施に関する意見交換（ワーク
ショップ）

意見交換では、お互いを知り、強みを持ち寄り、栃木市
らしさを伝えるために、どんなことをやったら良いかのア
イディアを出していただいた。参加者からは、「グリーン・
ツーリズムは収益があがらない仕組みなのは」、「農泊は
そもそも限定的なエリアでの考え方ではないか」など、既
にグリーン・ツーリズムに取り組んでいる地域組織の抱えている切実な思いなどを含め、率直な意見が
出された。



②第 2 回検討会

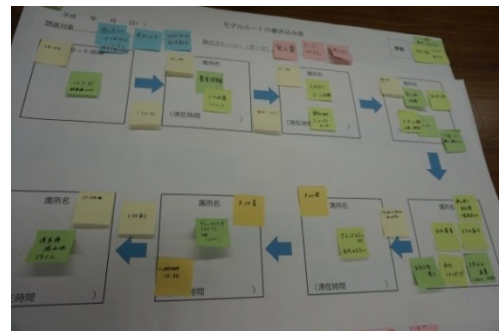
日 時：平成 30 年 1 月 24 日（水）

場 所：下都賀庁舎 第一別館1階 101 会議室

参加者：8名＋事務局 11 名

内 容：モデルプログラム実施に関する意見交換（ワーク
ショップ）

意見交換では、モデルプログラムのターゲット、テーマ及びプログラム案を検討した。具体的にターゲットやテーマを設定することで、誰に何を提供するかをイメージしながらプログラムを検討することができた。以降、モデルプログラムの企画・実施については地元旅行会社を中心に、事務局が調整に入りながら進めることとした。



③モデルプログラムの実施

日 時：平成 30 年 3 月 3 日（土）～4 日（日）

参加者：モニター 首都圏在住男性 7 名、女性 1 名 計 8 名
＋事務局 8 名

行 程：（1 日目）JR 栃木駅北口集合～太平山麓散策・昼食
（太平山）～流し雛体験（蔵の街）～蔵の街遊覧船
（蔵の街）～宿泊（栃木グランドホテル）



（2 日目）栃木グ
ランドホテル～に
ら収穫袋詰め体験（農事組合法人まがのしま）～いちご狩り
（いわふねフルーツパーク）～とちぎ花センター～意見交換
会（いわふねフルーツパーク）～昼食（農村レストラン円仁
庵）～JR 栃木駅北口解散



意見交換会では、「農村と街の両方に魅力を感じた」、「ガイド役の方の知識が詳しく楽しかった」、「ニラ収穫体験、滴る水がとても甘くて初めての体験でした」、「山登りに近い、散

策とは程遠い、装備など事前のアナウンスが不足していた」などの意見が出された。

④成果と課題

当地域におけるグリーン・ツーリズムの取組みは 2 年目である。昨年度は地域側の姿勢はあくまでも受け身であり、事務局が主体となってモデルプログラムを企画・実施した。したがって、事業の趣旨そのものも伝え切れず、地域側の理解を十分に得られないままに今年度継続して取組むこととなった。未だ地域側のグリーン・ツーリズムに対する意識の醸成が追いついていない状況の中で、経営者が地元出身で、地域への思いを強く持ちながら着地型旅行を展開している旅行会社に、ツアー造成に積極的に関わってもらうことで、調整段階から地域との連携を強化することにつながった。

ツアー実施の成果としては、蔵の街という栃木市の魅力と、農体験や自然景観等の非日常体験のコラボ企画の満足度が高く、栃木市ならではのグリーン・ツーリズムのモデルケースとなりうることで、地域の人との交流が満足度に大きく影響すること、首都圏からの地の利の良さが誘客上の強みとなることがわかった。一方で、魅力を伝えたいがために内容が盛りだくさんになりすぎたことから、グリーン・ツーリズムの場合は特にゆったりした時間配分を意識した企画を組むこと、街中の散策では自由時間を設ける工夫も必要であること、散策・トレッキング・山登り等内容が大きく異なる事柄について、事前に調査をしっかりと行い、募集時に詳細情報を提供することが重要であること等が浮き彫りになった。

今後の栃木市におけるグリーン・ツーリズムの方向性としては、ゆったり余暇を過ごし、昔ながらの原風景、景観、歴史文化、食、農体験などの非日常を味わうなど、グリーン・ツーリズムの本質を外すことなく、蔵の街と農村体験のコラボ企画の可能性を模索しつつ、栃木市らしいグリーン・ツーリズムを確立すること、そのためにも、行政の支援の下、農業体験や農家民泊などの受入先の拡大やグリーン・ツーリズム推進体制を確立すること、夜の街中が寂しいので、夕日、朝日、星空、ホテル観賞、地域の方を囲んでの夜の語らいなど、グリーン・ツーリズムならではの宿泊の動機付けを追求すること等が挙げられる。

1 趣 旨

過疎化・高齢化により農地の荒廃や集落機能の低下が進行している中山間地域と、新しいビジネスチャンスや地域活動への関心が高まる企業が連携した地域づくりや協働活動等を支援し、企業と地域の結びつきを深めることで、継続的な交流人口の増加と、地域の活性化を図る。

2 概 要

■企業及び農山村の情報収集及びニーズ把握

(1) 連携を望む企業の情報収集及びニーズの把握

①アンケート等の実施

実施時期：平成 29 年 8 月～9 月

配布先：とちぎ協働デザインリーグにおける過去の事業で関わった企業および経営革新計画承認先、農村振興課関連事業で過去に関わった企業 273 件

有効回答数：68 件（H28 年度 31 件） 回収率：24.9%（H28 年度 10.0%）

企業等の情報を収集し、地域連携活動ニーズに関するアンケート等を実施した。昨年とほぼ同様の配布先に配布し、回収率が昨年度を大きく上回る結果となり、地域連携活動に取り組む意向のある企業は7割を超えていることから、企業の地域課題への関心度が高まっていることが確認できた。有効回答先68件について、アンケート集計・分析を実施すると共に、アンケート結果をもとに関心度別「企業リスト」を作成した。

②企業ニーズの聞き取りと「企業カルテ」の作成

カルテ作成数：H29 年度 新規 14 社（H28 年度 新規 12 社） 計 26 社

相談会参加企業を中心に、プロフィールシートを事前に配布し、相談会終了後には、連携活動に向けた要望などの聞き取りを行うなど、個別にフォローアップを行いながら「企業カルテ」を作成した。

③「企業リスト」及び「企業カルテ」の管理

相談会後の個別の聞き取り結果等をもとに、企業リストの更新、リストアップ企業への各種情報提供、「企業カルテ」内容の充実及び連携活動に向けた個別の働きかけを行った。

(2) 連携を望む農山村地域の情報収集及びニーズの把握

①アンケート等の実施

実施時期：平成 29 年 8 月～9 月

配布・回答先：中山間地域に該当する地域組織 210 件

栃木県農業振興事務所と連携し、中山間地域に該当する地域組織向けに地域の現状、課題、特有の資源及び企業との連携の意向を把握するためのアンケートを実施した。企業連携に取り組むべきだという課題意識を持つ地域は約4分の1であった。一方で、わからないとの回答が5割を超えており、企業との連携のイメージが掴めていない状況が読み取れる。今後も引き続き地域に向けた企業連携への意識醸成の取り組みが必要であることが推測される。

②地域ニーズの聞き取りと「地域カルテ」の作成

栃木県農業振興事務所および関係市町と連携し、企業連携への関心のある地域へ働きかけ、関係者同席のもと地域組織への聞き取りを実施し、「地域カルテ」を作成した。

③「地域リスト」及び「地域カルテ」の管理

聞き取り結果をもとに、「地域リスト」の更新、リストアップ企業への各種情報提供、「地域カルテ」内容の充実及び連携活動に向けた個別の働きかけを行った。また、農業振興事務所、関係市町へ訪問し、担当者企業連携推進にあたっての地域の状況の把握やマッチングに関する意見交換を行った。

■企業と農山村のマッチング

(1) 連携活動を望む企業と地域の仲介

①相談会の実施

趣 旨：中山間地域との連携に興味のある企業が、中山間地域の方と直接対話をすることで、地域課題への関心を高めるとともに、連携の可能性を模索する。

<第1回相談会>

日 時：平成 29 年 10 月 24 日（火）

会 場：栃木県庁 北別館 201 会議室

参加者：企業 11 社 14 名、地域 4 組織 8 名、市町職員 6 名
農業振興事務所 4 名、事務局 7 名

<第2回相談会>

日 時：平成 30 年 2 月 23 日（金）

会 場：栃木県庁 北別館 402 会議室

参加者：企業 8 社 9 名、地域 4 組織 5 名、市町職員 9 名、
農業振興事務所 5 名、事務局 7 名

②連携を望む企業と地域の仲介活動

聞き取り結果や相談会の結果を受け、今後の連携活動へ発展する可能性のある地域について個別に支援を行った。尚、対象地域については次年度も引き続き支援を行う予定である。

(2) 協定の締結

とちぎコープ生活協働組合と栃木県中山間地域活性化推進協議会の連携活動について5回に渡る協議を重ね、協定締結に至った。

<協定締結式>

日 時：平成 30 年 3 月 1 日（金）

場 所：那珂川町役場会議室 204

内 容：とちぎコープの発行物・ホームページ・フェイスブックへの中山間地域活性化推進協議会の関連イベント等のお知らせや地域製品の紹介記事の掲載、とちぎコープ店舗の店外イベントでの中山間地域活性化推進協議会に関連する地域製品の販売ブース提供など



3 成果と課題

平成 28 年、平成 29 年と 2 年にわたり企業に向けて地域連携に関するアンケートを実施した結果、企業の地域課題への関心度が高まっていることが確認できた。また、2 回の相談会では、各回とも地域との連携活動に関心のある企業が集まり、積極的に地域組織や市町職員と対話をし、具体的な活動の検討にまで発展する事例も生まれた。協定締結に至ったケースでは、まずは出来ることからという視点で活動を模索したことが成果につながったと思われる。出来ることから、小さな一歩からという視点は重要であろう。

一方で、相談会開催に際しては、地域側の参加を促すのに苦戦した。地域側からすると、企業連携のイメージが掴めないのが実態であろう。地域組織とそれを支える関係市町職員の企業連携への意識の醸成が今後も必要ではないかと考える。また、潜在地域の発掘には、自分たちの地域をなんとかしたいという強い想いを持つリーダーの存在がポイントになると思われる。まずはそのようなリーダーの存在する地域の掘り起こしを行い、行政職員も加わりワークショップ等の手法を活用して、地域全体の意識を高めるなどの方法も考えられる。また、今後の事業推進にあたっては、地域側の対象の捉え方を柔軟にし、枠を広げること一案である。

地域と企業の連携活動には、多様な切り口が考えられる。連携活動まで発展させるためには、地域と企業のニーズを的確に捉え、多様な切り口を踏まえてコーディネートをする役割の存在が重要であろう。コーディネート役のスキルアップも必要であると認識している。

連携活動の促進には、まずは事例を 1 つでも生み出し、他の地域や企業に具体的なイメージを見せていくこと、そのためにも活動の大小は不問、小さな取組みでもまずは出来ることから始めてみる大切であろう。また、継続性を目指すためには、協定締結まで時間をかけて育てていく視点も必要である。

さらには、中山間地域の現状を広く発信し、企業や県民一般の支援が必要であることを啓発する取組み（シンポジウム開催や情報誌の発行など）も検討してみたいと思う。また、企業にとっては、資金面の支援以上に行政の広報への期待が大きいと思われる。

1 趣 旨

那須塩原市箒根地区にある金沢中（カネサワナカ）では、地域の郷土料理「のっぺい」を継承するため地元の女性による会が結成され、作り方の由来を伝えるとともに、郷土食を介して地域のPRに取組んでいる。今後、より地域を元気にするため、郷土食を含め地域資源を活かした取組についてワークショップで検討することにより、中山間地域の活性化を図る。

2 ワークショップの実施概要

■テ ー マ：～わたしたちが創る これからの金沢地区～

■会 場：那須塩原市金沢中公民館（18:00～20:00）

■対 象：金沢中老若ひめ隊 隊員

■参加人数：全3回、延べ44名

■概 要：

(1) 第1回ワークショップ：平成29年8月30日（水）

テーマ：地域の課題とニーズから私たちの wants を見い出す

主な内容 ・地域の良いところ、良くないと思うところ

・それらをどうしていきたいか

・わたしたちがやりたいこと（wants）

・未来の金沢をどうしたいか

(2) 第2回ワークショップ：平成29年9月29日（金）

テーマ：金沢の地域資源を未来へ

主な内容 ・地域資源の洗い出し（ヒト、モノ、コト）

・第1回「わたしたちがやりたいこと」と地域資源を
組み合わせて、現実に見出す（can）

・第1回「未来の金沢」との関連を見出す

(3) 第3回ワークショップ：平成29年10月20日（金）

テーマ：わたしたちが創る これからの金沢地区

主な内容 ・金沢を活性化するためのプランづくり

・第2回で見出した「わたしたちができること」のキー
ワードを単独でまたは組み合わせて、具体的な事業プ
ランの骨組みを作成する



3 成果と課題

那須塩原市箒根地区金沢中の女性組織「老若ひめ隊」は、伝統食「のっぺ汁」に誇りをもち、積極的に伝承しPRをしている。ひめ隊の女性たちは、活動意欲が高く地域活性化のためになにかやりたいと考えている様子がうかがえた。そこで、「これから、どこへ向かい、何をどうやっていこうか」という道のりを具体的に描くべくワークショップを企画実施した。意見集約の手法として、チームビルディングとして、また、地域資源の再発見や事業プランづくりとして、成果をあげることができた。

①過去及び現在の金沢地区についての意見交換を通して、未来の金沢のイメージを考え、共有した。

②地域資源と自分たちのやりたいこと（wants）を組み合わせて、9件のできること（can）を見出した。

③9件のできること（can）を、次の9項目について具体的に整理し、地域の特色である「のっぺい」や「老若ひめ隊」を活かしつつ地域内外に目を向け、テーマに沿った金沢らしい事業プランを立てた。

テーマ：「人の集まる楽しい金沢」（未来の金沢のイメージ）

9項目：事業名／目的／活動主体／顧客／活動内容・サービス／時期と場所／必要なモノ・人・カネ・コト／連携・協働／成果

プラン：地域内のコミュニケーションを意識した「みんな集まれ！景観&Beer」や地域外との交流「のっぺいサミット」、「パワースポットめぐり」等、多彩な事業プランが出来た。

④全3回のワークショップを楽しみながら、意欲的に取り組む姿勢がみられた。特に、「のっぺい」に対する愛着と「老若ひめ隊」への誇りが言葉の端々から読み取れた。今後に期待したい。

「伝えるコツを身につけよう」NPOのための広報スキルアップセミナー

1 趣 旨

NPO等は、社会貢献活動をしているにも関わらず、その思いや活動内容を上手に伝えることができていないケースが見受けられる。上手く情報発信を行うコツや方法を学び、事業活動に活かせるようになることを目的とする。

2 概 要

NPO広報力向上委員会、日本NPOセンター、株式会社電通から企画や準備運営等にご協力をいただきセミナーを開催した。

(1)日 時：平成29年10月12日(木) 10:00～16:00

(2)会 場：地方職員共済組合栃木県職員会館ニューみくら

(3)参加者：26名

(4)講 師：株式会社電通戦略クリエイティブ・ディレクター／コピーライター 杉谷 有二氏
株式会社電通中部支部統括・戦略クリエイティブ・ディレクター 岡本 達也氏

(5)プログラム

①参加したNPOが、日頃の活動を振り返り、「誰に何を伝えれば、私たちの団体を知ってもらえるのか？そのための広告表現はどうあるべきか？」を紙に書き出し、整理した（以下、整理するためのコツ）。

- ・自分を見つめることから、はじめてみよう。
- ・相手から自分がどう見えているか、考えてみよう。
- ・何をしたいのか、団体の目的を明確にしよう。
- ・団体の課題が何なのかを、はっきりさせよう。
- ・「誰に」「何を」伝えたいのか整理しよう。
- ・自分たちの活動を[ひとこと]にしてみよう。

②実際にチラシ制作を行った。チラシ制作に必要なコツは

- ・欲張らずに、情報の量を減らしてみよう。
- ・表現の“トーン＆マナー”を考えてみよう。
- ・読み手の目になって[デザイン]を工夫しよう。（テキストより抜粋）

③完成したチラシを一齐に壁に貼り出し、講師二人から一枚ごとに講評をいただいた。

チラシ作成のコツは「文字をなるべく減らし、インパクトのあるイラストや写真などを入れると、見た目も柔らかくなり親しみがもてるものになる。また、参加者を集めたい場合には、会場地図を入れることも大切」である。



3 成果と課題

本セミナーは、「チラシ作成以前に整理しておくこと」から始まった。単にチラシを作るということではなく、自分たちの活動や思い、目指す未来像などを一つひとつ整理したことで、これまで、自団体についてぼんやりととらえていたわけではないが、自身のなかで明確ではなかった事柄がはっきりと形になって見えてきた。また、今、明確に整理できなかった部分については、団体に帰って話し合ったり、見つめ直すことが大切だという学びがあった。

自分たちは何者であるかが、はっきりしたところで、実際のチラシ制作を通して、電通のプロから「伝えるコツ」を身につけるための様々な助言をいただくことができた。

参加者から、「講師から直接自分の作ったチラシに対し講評をいただけた。また、他団体のチラシについての意見も聞くことができ、学ぶところの多いセミナーであった」などの意見があった。チラシは、他者からどう見えるかを確認することで、しっかりと伝わるものになるということが目の前で展開された貴重な機会であった。

今回の「伝えるコツ」セミナーは、内容が濃くかなり充実したプログラムであったため、1日で学ぶには少し無理があったように思われる。条件が許せば、2日間でじっくり学ぶ機会を改めて作りたい。

地域における「第三者組織評価」普及促進プログラム

1 趣 旨

NPO 法人等の信頼性と透明性の向上を図り、社会と共有することで、団体に対するより充実した支援環境の構築に寄与することを目的として、一般財団法人非営利組織評価センター(JCNE)が NPO 法人等の第三者組織評価制度を実施している。今般、同制度を県内 NPO 法人等に普及し、活用促進を図るため、とちぎ協働デザインリーグが業務を受託し、実施した。

2 概 要

(1) 普及と宣伝

評価制度説明会の開催及び評価制度の理解促進のため、県内 NPO 法人等に対して広報を行った。県内 12 市町中間支援センターに向けて、説明会の開催案内等の配架依頼や、県内 NPO 関係者・行政等に対して、制度説明会の案内・理解促進を行った。その他、とちぎ協働デザインリーグのブログと Facebook において、説明会の開催案内・実施報告を掲載した。

(2) 説明会の開催

日 時：平成 29 年 12 月 20 日(水)
13:30～15:30

会 場：とちぎボランティア NPO センター 研修室 A

参加者：14 団体 16 名

講 師：一般財団法人非営利組織評価センター
業務執行理事 山田 泰久 氏

内 容：①話題提供「NPO を取り巻く環境とガバナンス」
②評価制度の概要と評価基準の説明
③ミニワーク「自己評価シートを使って団体の自己評価を体験」



3 成果と課題

今回の説明会への参加団体のうち、1 団体が評価制度を利用した。制度説明会のアンケート結果や聞き取りの結果から、「NPO 法人等の信頼できる情報が多く蓄積されることは、とても有益である。」という意見が多数を占めた一方、「NPO の活動は主体性を持ち自発的に行うものが多く、“評価”という概念に対して少なからず抵抗を感じる団体もあるのではないか。」といった意見もあった。NPO 等の信頼性向上のために新設された制度であり、今後、制度内容の充実などを注視していく必要がある。

とちぎ協働デザインリーグ10周年記念事業

1 目 的

とちぎ協働デザインリーグが平成 29 年 1 月で設立 10 周年を迎えるに当たり、記念の集いを開催した。

2 概 要

日 時：平成 29 年 7 月 31 日(月) 18:30～20:30

会 場：シテ・オーベルジュ

参加者：40 名

内 容：リーグ創設時から各事業等でお世話になった方々と共に、これまでに実施した事業の思い出や近況報告など、10 年間の歩みを振り返るとともに、今後の活動について、話が盛り上がった。



＜参 考＞ 平成 29 年度とちぎ協働デザインリーグ 理事会・総会開催状況

1 第1回理事会

- (1) 日時及び会場：平成 29 年 5 月 20 日（土）15:30～17:15 ぽ・ぽ・ら
- (2) 出席者：理事 7 名、委任状 4 名 計 11 名
- (3) 議 題
 - ① 役員改選
 - ② 慶弔規程の新設
 - ③ 平成 28 年度事業報告及び活動計算書報告
 - ④ 平成 29 年度度事業計画（案）及び活動予算書（案）
 - ⑤ 入会金及び会費の徴収について

2 総会

- (1) 日時及び会場：平成 29 年 5 月 20 日（土）17:30～18:00 ぽ・ぽ・ら
- (2) 出席者：会員 15 名、委任状 3 名 計 18 名
- (3) 議 題
 - ① 役員改選
 - ② 慶弔規程の新設
 - ③ 平成 28 年度事業報告及び活動計算書報告
 - ④ 平成 29 年度度事業計画（案）及び活動予算書（案）
 - ⑤ 入会金及び会費の徴収について

3 第2回理事会

- (1) 日時及び会場：平成 29 年 10 月 7 日（土）16:00～18:30 ぽ・ぽ・ら
- (2) 出席者：理事 8 名、委任状 6 名 計 14 名
- (3) 議 題
 - ① 平成 29 年度上期事業報告・下期事業計画（案）
 - ② 平成 29 年度活動予算書（補正案）
 - ③ リーグのあり方検討
 - ④ 次年度事業および体制について

4 臨時総会（書面決議）

- (1) 決議があったものとみなされた日：平成 29 年 12 月 14 日
- (2) 議 題
 - ①事業の追加に伴う平成 29 年度補正予算について

5 第3回理事会

- (1) 日時及び会場：平成 30 年 3 月 10 日（土）16:00～18:00 ぽ・ぽ・ら
- (2) 出席者：理事 6 名、委任状 5 名 計 11 名
- (3) 議 題
 - ① 平成 30 年度事業計画（案）及び予算（案）
 - ② とちぎ協働デザインリーグの法人化について

とちぎ協働デザインリーグ
平成 29 年度事業報告書

企画・編集
とちぎ協働デザインリーグ

発 行
とちぎ協働デザインリーグ